

H28. 3. 1

長尾和宏(ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。



そこから車で1時間ほど揺られるうちに、目的地のお寺に着。人口わずか二百数十人の小さな村です。実は「コンケンには認知症という言葉がない」という触れ込みでした。そこは小さな村ですから、村長さんやお寺のお坊さんはどこにどんな病人がおられるのか、正確に把握されています。私はお寺のお坊さんに連れられ、その村に数人いる寝たきり状態の高齢者の家を訪問しました。

# Dr. 和の町医者日記



「認知症の基礎知識」シリーズ⑪

2月11〜14日、研究のため、生まれ初めてタイを訪問しました。バンコクから飛行機を乗り継ぎ、タイ東北部にあるコンケン県という地方都市へ行ききました。日本にたとえるなら、福島県といったところでしょうか。


果たして、そんな小さな村にもちゃんと認知症の人はいました。どうして認知症って分かるかって？ 実は通訳さんを介して、年齢を聞いてみたのです。答えた年齢が10歳以上も離れていたら、そりゃ認知症でしょう(笑)。でも、認知症に相当する言葉はありませんでした。

家族は皆、「年をとれば仕方がないこと」と諦めているようでした。ちなみに、コンケンには介護に相当する言葉もありません。もちろん、介護保険制度、介護施設、ケアマネジャー、福祉用具など介護に関係する言葉は一切なし。

ついでに言うと、日本の国民皆保険制度に相当する医療制度もありませんでした。その代わり、庶民のための最低限の医療制度として30% (日本円で100円相当) 医療があります。村では、見るからに死期が迫っている高齢者は家の軒下で寝ころんだまま、近所の子供たちと遊んでいました。古い水道管で工作した歩行器でトイレまで歩き、歩けない人は床をはっていました。

犬や猫や鶏などの動物は、1匹たりとも鎖につながれていません。もちろん、高齢者もみんな好きなように移動していましたが、そして、自宅の軒先で枯れるように、家族やお坊さんに見守られながら旅立つというのです。

結局、タイの田舎の村にあったのは「老い」という言葉だけ

 **タイ王国** 面積は日本の約1.4倍、人口は約6600万人。94%が仏教徒で5%がイスラム教徒。伝統的に柔軟な外交を維持しつつ、東南アジア諸国連合(ASEAN)との連携、日本などの主要国との協調が外交の基本方針。

## 認知症という言葉がない村

け。日本の介護施設のように2重、3重の鍵や抑制、虐待は皆無でした。お坊さんは日本よりずっと尊敬されていると感じました。

日本のお坊さんは、大切な人が亡くなってから登場しますが、タイのお坊さんは毎朝、村人とともに食事をし、村を巡回し、小学校では子供たちに声をかける。午後は医者への代わりに村人たちの相談に乗っていました。タイのお坊さんはまさに今生きている人のために活動し、お寺は地域の中心の公民館のような場所でした。

さて、日本では90代の人「腰や膝が痛い」という訴えで専門医を受診し、そこで医師がその人に「老い」という言葉を使うものなら、とたんに怒りだす人が多いです。おまけに、子供さんが後で怒鳴りこんで来るケースもあります。

日本では「アンチエイジング医学」で、どこまでも老いと闘おうとする医療がもてはやされます。裸の王様ではありませんが、私のように本当のことを言うのと、患者さんもご家族も二度と寄り付かなくなります。

わが国の高齢者医療や介護は、何かと欧米を手本にしたがります。しかし、今回の視察で、タイの田舎など東南アジアに学ぶべきことがたくさんあると思ひ直しました。「老い」を病ではなく、自然な変化として受け入れる。日本人が忘れた文化だと思ひます。

### タイ王国コンケン県